HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 横井小楠の經世思想研究［論文内容及び審査の要旨］ |
| Author(s) | 田海, 秀穂 |
| Degree Grantor | 北海道大学 |
| Degree Name | 博士(文学) |
| Dissertation Number | 甲第13838号 |
| Issue Date | 2020-03-25 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/78693 |
| Rights(URL) | https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/ |
| Type | doctoral thesis |
| File Information | Shuho_Taumi_abstract.pdf, 論文内容の要旨 |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　田海　秀穂

学位論文題名
横井小楠の經世思想研究

**・本論文の観点と方法**

本論文は、江戸時代幕末期に活躍した開明的思想家横井小楠（1809-1869）が熊本藩の藩政改革に志した天保年間から、福井藩の政治顧問として活動した文久年間にかけて著した書簡及び論考を中心資料として取り上げ、その朱子學觀・名君論・學校改革論・西洋觀について考察し、小楠の經世思想の特色の解明を試みた基礎的思想研究である。

**・本論文の内容**

第一章「熊本藩校時習館の教育理念－『時習館學規』の考察－」では、小楠が學んだ熊本藩校時習館の根本規則である「時習館學規」について考察している。「時習館學規」を起草した秋山玉山（1702-1763）は、徂徠學派の學風に親しみ、自由で寛容な教育觀を有していた。これが時習館の學業課程にも反映されて、個々の學生の能力と個性に應じた様々な教育的配慮が存在したことを確認している。その反面、時習館を創設した第六代藩主細川重賢（1721-1785）は、人材養成と綱紀肅正の兩面を重視し、父の勤務成績と子の文武の才能次第では知行を減ずる「知行世減の法」を定めている。これがその後の時習館の學風を成績第一主義へと傾斜させた要因となったのではないかと指摘している。また、「時習館學規」と中國明代の『明會典』巻 173「国子監・監規」との條文比較を行い、「時習館學規」の成績や賞罰に關する規定の多くが、『明會典』を參考にしていることを実証している。

第二章「横井小楠の朱子學觀―小楠から本庄一郎宛書簡の考察―」では、小楠が久留米藩の儒學者本庄一郎（1786-1858）に宛てた書簡を取り上げ、小楠の朱子學觀と本庄のそれと對比しながら檢討している。小楠は、朱子學系の經典注釋書の優劣を論じ、特に明代に科擧の基準とされた『永樂大全』について、朱子の思想を歪曲した元凶であるとして嚴しく糺彈したと指摘している。また、朱子以後の中國・朝鮮及び日本の朱子學者について論じ、朱子學を標榜する儒學者の多くが訓古記誦の學に墮落し、自己修養を怠っている現狀を嚴しく批判したと指摘している。この書簡の考察を通して、藩政改革運動に挫折し、熊本藩内で疎外されていた小楠が、朱子學は實踐躬行の實學であると考え、學者には現實社會の問題解決に實踐的に取り組む使命があると考えていたことを確認している。

第三章「横井小楠の名君論」では、小楠が諸侯に關して述べた論考を中心に取り上げ、彼の君主觀について考察を加えている。時習館の居寮長時代に著した「戊戌雜志」（1837）では、水戸藩主徳川齊昭（1800-1860）と佐賀藩主鍋島直正（1814-1871）につ

いて論じ、女色を好んだ齊昭よりも直正の質素な生活態度を高く評價していると指摘している。また、同じく居寮長時代の作である唐の『貞觀治績政要』について論評した「『貞觀治績政要』の一書は考うべし。而れども其の最要を論ずれば、何れの事に在るかを知らず」（『貞觀治績政要』一書可考。而論其最要者、不知在何事）（1837）では、小楠は、唐の太宗（598-648）と熊本藩主細川重賢を比較し、名君の役割は、有能な家臣を登用して仁政を實現させることであり、名君には人材を見極める人智と決斷力が求められると論じていると指摘している。そして、「『見聞私記』の後に題す」（題『見聞私記』後）（1843）では、多くの諸侯が自分一人の狹い知識を賴り、一時の氣慨を志と誤解し、功名心に走る者ばかりであると酷評し、同時代では長州藩主毛利齊廣（1814-1837）を高く評價し、過去の諸侯の中では米澤藩主上杉治憲（1751-1822）を聖人の道を實踐した稀有の名君であると稱贊していると指摘している。

第四章「横井小楠の學校改革論」では、小楠が福井藩に提言した「學校問答書」（1852）と「文武一途の說」（1853）の二つの論考を取り上げている。小楠は、「學校問答書」では、「學政一致」の理想像を堯舜三代の治世に求め、學校は貴賤老少を問わず相互に講習講學しあう場であるとしている。この小楠の主張には、彼が天保期に熊本藩の藩政改革運動の中で同志らと實踐した講學體驗が生かされていると指摘している。また、「文武一途の說」は、ペリー來航の直前という對外的緊張が高まった時期に書かれた論考である。福井藩でも攘夷必戰體制の構築が盛んに叫ばれていたが、小楠は、朱子のような文人が武を掌るべきであると主張した。これは小楠が軍事優先の政治がもたらす弊害を危惧して、文民優位の必要性を說いたものであると指摘している。

第五章「横井小楠と橋本左內の學問論の比較」では、橋本左內（1834-1859）と小楠の學問論について比較している。左內は、蘭學者として身に付けた西洋の先進的な知識を武器に福井藩校明道館の刷新に取り組み、實學的な學術・技術の導入を積極的に推進した。しかし、左內は、西洋知識の無軌道な攝取は、我國の傳統的な秩序や風俗を亂す要因になるとして、あくまで封建支配を補强する技術として、これを統制的に利用しようする立場を崩さなかった。これに對して小楠は、自由な講習講學を重視し、西洋と東洋に通じる普遍的な價値の存在を見出していたことを確認している。

第六章「横井小楠における海外知識の受容」では、小楠の海外知識について考察している。小楠は「讀鎖國論」（1839 頃）において、鎖國主義を肯定しつつも、西洋と日本との間には、それぞれ獨自の道が存在していると指摘し、さらに「夷虜應接大意」（1853）においては、萬國共通の普遍的な道の存在を認めている。この二篇は、小楠が鎖國攘夷主義から開國主義へ轉換する契機となったと指摘している。また、小楠が福井藩に提言した『國是三論』（1860）の中で、イギリスの海軍力の現狀について述べている內容が、從來の研究では、出典不明とされていたが、イギリス人宣教師ウイリアム・ミュアヘッド（1822-1900）がトーマス・ミルナーの『英國史』を漢譯した『大英國志』（上海墨海書院刊、1856）の文章からの引用であることを特定し、小楠が『大英國志』を通じてイギリスの議會・財政・軍事の諸制度を學んでいたことを明らかにしている。